
Your name is

夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Your name is

【Nコード】

N8131V

【作者名】

夢

【あらすじ】

ごく普通の中学生。それが俺だ。ごく普通の日常を送って、少しはしゃぎすぎの妹と生活して、幼馴染の女の子と大切な時間を過ごして…それが、俺の日常だった。だったのに…すべてが壊れた。俺の日常は自身の心に秘められた力が解放された時に壊れた。そう、あの一夜が、俺のすべてを変えて、だけど、思春期の俺にとってはもっと酷い…いや、男としては嬉しいんだけど、ラブコメ的なことが起こってしまって…でも、それはファンタジー小説に出てくるような俺の封印されし力によって波乱の日々に変わって……もう、

わけわかんねえ。

第一話 とある兄妹の日常（前書き）

この小説は、主人公視点、ヒロイン視点、第三者視点で描かれています。もしかしたら、たまにややこしくなるやもしれません。

第一話 とある兄妹の日常

「あなたの名前は何ですか？」

何だろう……。僕の名前……。一体なんだっただけ。

「あなたは自分の名前を愛していますか？」

さあな。僕にも分からない。

「私の名前を覚えていますか？」

ああ、覚えているさ。君の名は。

「おはよう！朝だよ！」

なぜだろう。朝からいかにもライトのベルにありそうなシーンがおきようとしている。

そう、妹に起こされると……。ギャルゲーの世界のシーンが発生する寸前。

だが俺はそんな妹に起こされるようなやわな中学生ではない！

「今日は私の抱きつき度が通常の三倍だあ！」

ベッドに飛び込もうとしている妹・凜。

「通常の三倍だったら俺は窒息死だ！」

すかさずベッドから非難。凜はベッドにダイビングした結果、角に頭をぶつけた。

「ふぎやあ！痛すぎるう！」

「勢いよく飛ぶからだよ。そんな派手に起こされると俺はお前の朝飯作ってやらないぞ」

「なぬ！それは聞き捨てならない台詞……可愛い可愛い妹に虐待をするの！お兄ちゃんは！」

「お前に何をしても法律は無罪を証明してくれるさ」

「そんなことないもおんだ。法律は私の味方なのだ！はっはっはっ！」

「その笑い方は完全に悪役だな」

そう言いながら、俺は凜に背を向けて着替えを始める。

「おお、お兄ちゃんのヌードシーン……これは貴重ですなあ」

「おっさんかよ、お前は。早く着替える。もう六年生なんだから自分でできるよな？」

着替えを終わらした俺は凜の相手を軽くしながら自分の部屋を出て行く。

凜は俺についてきている。まあそんなことはどうでもいい。その前に朝食を作らなくちゃ。親は蒸発しちゃうから俺は家事全般やらなくちゃいけない。すっげえ面倒くせえったらありやしない。

これが日常なのだから……尚更辛い。唯一の肉親がこのバカ騒ぎしている凜だなんてな。だけど、凜がいなくなったら、俺は今度こそ一人ぼっちだ。いてくれるだけでも有難く思わないと。

はあ……早く飯食って学校行くか。

「うん？」

なんとなく時計をしてみる。今日は部活がないから八時に家を出るべきなんだが……

「な、何だと！おい、凜！」

「なあに、お兄ちゃん！」

これがゲームや小説なら、間違いなく遅刻ルート。だが……もっときつい。

「今、朝の四時じゃねえか！」

第二話 当たり前のことを言うが、中学は義務教育だ

世間一般に人気なスマートフォン。もちろん義務教育の中学校には持ち込み禁止だが、俺は登下校は堂々と持ち歩いている。今は音楽を聴いているため、ヘッドバンドを身に着けている。ヘッドバンドは両耳に当てるもの。普段俺は耳に差し込む形式であるイヤフォンをつけているが、学校での俺は何かと目立つ存在なので、俺自身目立つ行為をしているというのだ。俺は他人から見た自分を知らない。この前俺は同級生に頼んで、他人から俺はどう見られているのか聞いてみた。そしたら、結構な量の答えが返ってきた。

- ・みんなの中心的人物。
- ・みんなを楽しませるムードメーカー。
- ・頭が良い。
- ・好青年。
- ・何かとトラブルに巻き込まれやすい体質
- ・物忘れが酷い
- ・校則破りのヤンキー

以下etc……

なんかほとんど印象悪くなってきてるけどそれはあえてスルーしよう。みんなもスルーしてくれ。

まあ、そんなわけで、俺は目立つ存在であり、みんなの頂点に立つ男だ！

「何一人でにやけてんの、お兄ちゃん？」

凜がひくう〜と言った表情を見せる。

妹にきもいって言われてるような顔で見られる兄の気持ちがよ
うやく分かった……

まあ、別にそんなことどうでもいいんだ。

問題は……

「いやあ、実に距離が長い……」

俺の家から中学までは距離がとても長い。だから早起きして早く家を出ている。凜の通う小学校は中学校の隣接であるため、通学路は同じだ。

いつもならここらへんで、あいつと会うんだけどだなあ……

「わあっ！」

「うおっ！」

いきなり後ろから抱きつかれた！何奴だ！

「って、怜奈……朝っぱからなんてことしてんだお前は……」

周りの視線が痛い。

「ごめんごめん。ドツキリ大成功だね」

「ったくよ……」

怜奈はようやく俺から離れた。

「おしどり夫婦ですね」

「違う！」

「違うわよ！」

「声がハモったですね」

凜が俺と怜奈をからかう。

ちなみに、さっき怜奈がドツキリと称して抱きついてきたが、決して恋人だからではない。怜奈はただの幼馴染であり、抱きついてきたのは彼女にそういう癖があるからだ。よく恋人だあ、とか、おしどり夫婦などと言われてからかわれることがあるが、断固否定する。

「凜、何回言ったら分かる。俺たちはただの親友だ」

「幼馴染じゃなくて？」

「幼馴染だから、親友なんだよ」

そこで俺はウインク。

「リイ君、それはないよお」

「……だよな」

これも俺の当たり前の日常だった。

第三話 学校でやるべきこと？そんなの勉強じゃなくて交流だろ

「じゃあな、凜」

学校に着いたため、ここで凜とお別れ。

俺は怜奈と共に教室に向かった。

ちなみに、俺は一年一組だ。怜奈曰く、変わり者が集まっているらしい。

まあ、変わり者が多かろうと、この俺様には関係なんて……

「リイ君、いつとくけどクラスで一番の変わり者は君だよ？」

「え、そうなの？」

いや、その前に、俺の心の中なんで読めたの？

まあ、聞いてもわからないな。

「おはよう！」

教室に入るとき、俺がこうやって元気な挨拶をすれば……

「よう、今日も元気だな！」

「おはよう、斑神君！」

俺は人気者だな。

「浮かれた顔してるわよ」

隣で怜奈に指摘された。

俺って、表情そんなに分かりやすいのか。気をつけたほうがいいかな。

俺は自分の席に向かう。ちなみに、最前列の真ん中であるため、授業中も視線を浴びる。見られやすい位置だからだと思っただが、なぜか女子の視線が多いのは気のせいなんだろうか。

「お、斑神陸は今日もみんなの視線を浴びてますなあ」

俺に話しかけてきたのはクラスメイトの北上明人^{ほくしゅあきと}。少数の男子友達のうちの一だ。なぜか男子が俺に寄ってこないんだよなあ。代わりに女子が寄ってくる。まあ、健全な男子としては有難いんだが。「おう、どうした？」

「今日小テストだけど、お前勉強してきたのか？」

「げっ！忘れてた！」

俺は慌ててロッカーから数学の教科書を取り出した。

第四話 授業ってやっぱ寝ちゃっつよね

「陸、授業中ずっと寝てて先生に気づかれないなんて奇跡としかいいようがないよ」

明人、俺もそう思うぜ。

俺は自称居眠りが得意だが、授業の最初に熟睡して先生に気づかれなかったのはびっくりだった。気づいててもう呆れられているという線も考えられたが、第三者からの観点で見ればその考えは0%だ。

よって、俺は先生に気づかれなかったことになる。

「しっかし、あれで寝てるなんてね、私も気づかなかったよ」
怜奈が言った。レナ曰く、それは神技らしい。

俺はバレないようにと、肘をつついて右手で拳をつくって顔を支え、俺の利き手である左手でシャープペンシルを持ったまま睡眠についた。それが幸いを呼んだか。

「あっという間に午前が過ぎたぜ」

「ほとんど寝てたでしょ」

怜奈のツツコミはスルーする。

「よし、飯だ！」

俺は無理やり話題を変えて俺は弁当箱を開ける。

ちなみに、自炊弁当だ。凜は調理はできるが、兄として俺が責任を持って二人分の弁当を作っている。

「いつもおいしそうだね」

怜奈がよだれをたらしそうな勢いで俺の弁当を見下ろす。

「今度作ってきてやるうか？」

「ええ、いいよお、悪いしに」

「まあ、遠慮すんなって！」

「じゃあ、俺にも！」

「男に作る飯はないな」

「なんだと！」

明人が怒鳴り散らす。

「にはははは！彼の弁当は私だけの弁当なのだよ、ワトソン君！」

「これは俺の」

俺の弁当を奪おうとして無理やり引き離した。

ま、これから先本当にそうなるとは思わなかったけど。

俺は腹がすいてたから猛スピードで弁当にありつく。

「くったくくったあ！」

「早っ！」

ありつく時間、実に20秒だった。

第五話 人の価値って、なんですか？

放課後。俺は、家に帰る前にコンビニによって雑誌を呼んでいた。怜奈は先に家に帰った。

俺自信、今は一人でいたい気分だった。

「凜の奴、なんで電話に出ないんだ？」

凜はついに反抗期になったのだろうか。

電話にもでない、メールにも変身しない。

兄の俺が悪いことでもしたのだろうか？

まあ、兄弟喧嘩ってのはいつのまにか終わってるもんだ。

誰がなんといおうと、俺はそう思う。

俺が呼んでいる雑誌は、情報雑誌だ。

一番の見出しを見る。

《謎の殺人事件！》

死体は誰か認識することもできないほどばらばらにされているため、雑誌に映る死体写真はモザイクばかりだ。

こんな手間のかかることするなんてな、殺戮を楽しんでいるか、相当のバカだな。

「夕飯、どうしようかな……」

家に帰ると、何処にも妹の姿はなかった。

「あいつ、何処いったんだ？」

まあ、友達とどっか言ってるんだろうな。夜まで帰ってこないのだろうか……

何かと考えていると、家の玄関が開く音がした。

「凜か？どこ言ってる……」

部屋に入ってきたのは俺にとって見知らぬ男だった。深くフードをかぶって顔は良く見えないが、体型からして男だ。黄土色のロー

ブを着ていて、手足はローブによって隠れている。

「あんたら、誰だよ」

「お前が、斑神陸か？」

「ああ、そうだが」

そう答えた途端、頭に鈍い痛みを感じた。男に頭をつかまれた。そのまま俺は体を掴み上げられた。

「お前はまた、あのことを覚えてるか？」

「なんの、ことだ……」

「記憶障害だというから、お前も探すのに急かされたんだ。可能性のある奴を片っ端から殺しては誰か分からないようにするのも面倒くさかったんだぜ」

「お前……バラバラ死体事件の……」

「ふん、答える必要はないな」

俺は男に思いっきり投げ飛ばされた。

「ぐはっ！」

壁に叩きつけられ、俺は勢い良く床に転がり落ちる。

「なんなんだよ、てめえは……ぐはっ！」

腹にけりをくらった。

鈍い痛みが走った。

「おもしろいなあ。お前は。目も瞑らないのか」

男は俺の右腕を掴み、力を入れた。

「ぐわああああああつ！」

人の腕力とは思えないほどの力だった。

一瞬にして、俺の右腕から骨が砕ける音が響いた。

「骨を粉々にしたが、こんなじゃまだ足りねえ……だが、お前は
まだ殺すわけにはいかねえんだよなあ。たくよ、惜しいぜ」

その男の声を聞いたのが最後だった。俺は、さらなる男の蹴りに
よって頭に痛みが走り、そのまま気を失ってしまった。

第六話 人が人じゃないって、どう説明すればいいんだろう

ここは何処だ……

目を覚ました場所は、俺の知っている我が家なんかではない。むしろ室内ではない。冷たい夜風が俺の頬にぶつかっている。

何も見えない……視界を布かなにかで遮られていて何も見えない。俺は倒れていた。砂地の上に。仰向けに倒れていて分かった。俺の両手は後ろで縛られている。そのため、砂が俺の手にあたった。ジャリジャリする。

「これは……」

急に何かが軋む音が響いた。この音は、ブランコ。いや、シーソーか。

きつと、ここは公園なのだろう。俺はすぐに予想できた。

俺を襲ったフードの男。あいつが俺を縛りつけ、公演まで運び込んできた。可能性はそれしかなかった。

「力はまだ発動しないようだな……」

左のほうから覚えのある声が響いた。俺を襲ったクソ野郎だ。

「何が目的だ。凜はどうした！」

きつと、凜が帰ってこないのもこいつのせいだ。こいつのせいに決まってる！

「なあ、目隠し、外してやれよ」

男の他に誰かいるのか。男は誰かに指示を送っている。少なくとも、二人はいる。指示をだした男と出された人物だ。

「うぐっ……！」

目隠しを外された俺はまず、目隠しを外した人物を見た。

「……凜！？なんで……」

「ごめんね、お兄ちゃん」

凜は悲しそうな瞳で俺を見た。

なんで、俺をそんな目で見る？

そんな目で見るとなよ……似合わないじゃないか。

「悪いな。貴様の妹はお前の力を解放させるために協力してもらっている。もちろん、こいつは色々可愛がったがな」

フードの男は凜の頭を叩いた。俺が啞然としている間に凜は男の傍に歩み寄った。

「貴様……凜に何をした！」

「調教さ。少し荒々しいがな」

「……！？貴様、よくも！」

俺の心の鎖が、砕けた。

俺の両手を縛るロープは粉々に砕けた。俺はすぐさま起き上がり、男に襲い掛かる。

だが、フードの男は俺の攻撃を軽々と避けた。それどころか……

「お兄ちゃん！」

凜が叫んでいるのが聴こえる。そりゃそうだ。俺の腹に銀色に光る刃が突き刺さってんだから。

「まだまだな」

男は刃を抜き取る。その刃はナイフでも、剣でもない。

男の右手だった。

「なんで、手が……」

「お前はこの世界のことを何も知らない。自分の力さえも、俺たち魔導士の存在も」

次に男の右手が俺の心臓を貫いた。俺はそのままよろけ、身体が崩れ落ちた。

もう死ぬのか……短い人生だったな。

凜……お前の笑顔、もう一度見たかった……

あなたはまだ、死んじゃ駄目。

頭に声が流れると共に、俺の心の何かが覚醒した、感覚がした。

「ほづ……やっと覚醒したか……」

男はにやりと微笑んでいる。

「凜を……返せ！」

俺の身体は跳んだ。飛躍的に高い。

身体が軽い！

体重がないと思えるぐらい、俺の体が軽くなっている。

「アアアアアアアアア！」

雄叫びを上げ、俺は空中で右手の平を男に向けた。

掌にエネルギーが集中し、粒子状の球体を作り出した。

「くらえ！」

緑色に光る粒子の球が男を直撃した。男は球の速さから逃れることはできなかつた。

「……波動、なんて力だ。だが、これまでだ」

男は向きなおり、凜に右手の刃を突きつけた。

「なっ！」

俺は男の前に着地した。だが、攻撃できなかつた。凜の首筋に男の刃が突きたてられているからだ。

「妹はもらっていく。お前は、ここで死ぬ」

男は左腕を振るつた。突如、左腕を振るつた近くの空気が一変にして変わった。炎が上がつたのだ。突然現れた炎は俺を襲う。

「グワアア」

近距離からの攻撃をたやすく回避することは難しい。俺の身体はたちまち炎につつまれていく。

「こんなものおお！」

それは、俺自身驚くほどのパワーだった。両手の掌から水が射出したのだ。まるで、消防隊でおなじみのあの水だ。

俺は水によって体の炎を消した。大量のやけどを食らうはずだが、無傷だった。火傷のあとはない。強いて言うならば、衣服が燃えただけだった。

「どうなってんだ………凜！凜は！」

ようやく気がつく。だが、公園を180度見回しても男と凜の姿

は見当たらない。

「リイイイーン！」

第七話 あなたはどこにいますか

「ここは……」

目が覚めると、そこは俺の部屋の天井なんかではなかった。ベッドから天井を見上げると、そこには決まって俺の好きなアーティストのポスターが張られている。だが、今俺が見ているのはポスターでもなんでもない。真っ白な天井だ。色もポスターも何もかもがない。視界の隅には、点滴が映っていた。

そこは、病室だった。俺は病院のベッドで寝ていた。

「目が覚めた？」

「怜奈……」

病室に入ってきたのは俺の幼馴染である怜奈だった。

「俺はなんで、こんなところにいるんだ？」

「公園で倒れていたの。そのまま病院に運んで……もう数週間以上たっているわ。私たちすごく心配したのよ？」

俺は手を見た。包帯が巻かれている。

ふと、あの夜の光景が頭をよぎった。燃え滾る俺の手から出たのは、大量の水だ。それで俺は自分の体中の火を消して、凛は……

「おい、凛はどこだ！」

俺は点滴を無理やりはずして、怜奈を襲い掛かるほど素早く肩を掴んだ。

「怜奈。凛は今どこだ！」

「私にも分からない。今警察が街全体を搜索してるけど、手がかりさえ見つからないの」

「……そうなのか」

とたんに、俺の体から力が抜けた。俺から開放された怜奈はひよろつとよろめいたが、またすぐに体勢をたてなおした。

「凛は、俺にとって唯一の肉親なんだ。必ず危険には晒さないって、護るって決めたんだ。なのに、なのにこの有様だ！ちくしょう！」

俺はやけくそに拳をベッドにぶつけた。なにもかもが憎くなってきた。目の前で同情している怜奈が、凜を見つけれない警察が、凜を連れ去ったあのフードの男が、凜を護れなかった自分自身が、憎くて憎くて仕方がない。

「こんなところで、寝ていられるわけねえだろ」

俺はベッドから起き上がった。

「駄目だよ、まだ安静にしとかないと」

「黙れ！」

俺は腕を払って怜奈の首を絞めようとした。だが、俺の手は握る前に怜奈を苦しめていた。

「なっ……」

俺は腕を下ろした。怜奈が咳き込む。苦しみから解放されたようだ。

「なんなんだよ、この力は……」

なんだろう、俺はこの力が理解できない。なのに……

昔から、知っていた気がする。

第八話 哀しみを消す方法なんてものはない

ようやく退院した俺は、凜と一緒に住む家にいた。

いや、今となつては、住んでいた、という言葉が相応しいか。

親の写真なんてものはない。俺が燃やした。クソ親父なんて昔から喧嘩ばかりだったらしいし。

らしいというのは、俺が覚えていないということだ。

「この力は、一体なんなんだ？」

俺は自分の手を見つめた。ごく普通の手だ。大好きなバスケットで、好きな人と手を繋いできた手だ。それが、いきなり水を射出しやがった。

「……水か」

俺は洗面台の前へ来た。

なんとなく、右手を鏡に向けてかざした。すると……。

どこからか現れたのか全く検討がつかない。水が、鏡から吹き上げてきた。

「どつなつてる」

さらに手を適当に振る。ゆつくりと。

手の動きに合わせて、水が動いた。空中で。

水が宙で舞っているのだ。全く持って、信じ難い行為だった。

「知りたいか、その力が」

「なっ！」

急に、後ろから声が響いた。反射的に俺は後ろに振り返った。

男がいる。凜をさらった大男ではない。ましてや性別は男ではない。

長身の女性だった。長い髪を後ろでポニーテール風に一束ねしている。洗面台があるここは明かりが薄いため、少しくらいが女性の姿はつきりと認識できる。肌の白さからして、温帯地域の人間だろうか？

「誰だよ、あんた？」

「名を名乗るほどでもない、今はまだな」

「この力を知ってるのか？」

俺は聞く。俺の後ろでは、水が舞っているだろう。

長身の女が、不適に笑うのが見えた。

「お前のその力がなんなのか知りたかったら、私についてくることだ」

そう言うと、女は後ろを向いて、走り出した。

「おい、ちよつと待てよ！」

当然、俺は女を追いかけた。家を出て、女は裏山の方角に向かっていた。

裏山に、なんかあるのか？

行ってみないと分からないな。

「くそ！予想以上に速い！」

あの女、どうなつてやがる！

いちいち考えていてもしょうがない。

俺は知らなくちゃいけない。この力のこと。凜をさらった大男のこと。そして、凜を救う方法を。

今の俺じゃ、あの男には勝てないだろう。だけど、強くなれば、きつと勝てる！

今は、そう信じるしかない。

「どうした？遅いな！」

そう言いながら、女は空高くジャンプした。

「なっ！」

あれはジャンプなのか？いきなり、住宅地の屋根よりもさらに上を跳んだではないか！

そのまま女は屋根に着地して、屋根から屋根へと飛び移った。

「ちくしょー！」

俺をジャンプした。

え？

俺は、宙に浮いていた。いや、違う。あの女のように、高くジャンプしてるんだ！

そして、俺は屋根に着地した。

「なんなんだよ、この力……」

絶句することもままならないまま、女を追うことしか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8131v/>

Your name is

2011年11月3日22時09分発行